
星は鳥と歌う。

空気

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星は鳥と歌う。

【Nコード】

N3178E

【作者名】

空気

【あらすじ】

星はとても綺麗。なのにぼくだけは綺麗じゃない。自分で光ることもできない。自分を探す星のお話。

ぼくは星。

いちめんのくろい絨毯にきらきらと輝くほし。
でもひととき元氣のない、ほし。

なんでぼくだけあまりかがやけないんだろう。
みんなと同じようにきらきらとしたいのに。

ぼくは星なのに。

したをみるとみんなを観察しているにんげんたちがいた。

「ほら、ごらん。みんな綺麗に輝いてるね」

そのみんなに僕は入ってはいないんだ。

なんでぼくだけ見てももらえないんだろう。なんで僕はみんなとはちがうんだろう。

ぼくだってほしなのに。

かなしくてなみだがでる。ぼくだって星なんだよ。認めておくれよ。
かなしくてきょうも一人なかまはずれ。

またひとりのよるがすぎていった。

今日は早起きをした。みんなはまだ眠っている。

ぼくだけが目を覚ました。

「そうだ、今ならばくに気付いてくれるかもしれない」

ぼくはまだ薄明るい空に一人ですがたをあらわした。

まわりをみてもぼくだけしかない。

みんな気付いておくれ。ぼくだってきらきらがやいてるよ。

だんだんと暗くなる空の中、だれも僕に気付いてくれなかった。
みんなも起き始めて輝きだす。

またぼくは目立たなくなつた。

どうしてなんだろう。

どうしてぼくはほしなんだろう。

本当に星なのだろうか。

お月様に聞いてみよう。

お月様のところに向かつて飛んでいった。

「あ、流れ星。でもあんまり綺麗じゃないね」

にんげんの声が聞こえた。

やっぱりぼくはほしじゃないのかな。

「お月様、どうして僕はみんなとちがうの？」

お月様はいつもにこにこみんなを見ている。

「どうしてそう思う？」

お月様はにこにこして僕に問う。

「ぼくは星じゃないから？」

ぼくはほしじゃなくて本当はもっと別の何かなのかなとおもつた。

「じゃあ探しておいで。本当のきみを」

お月様はにこにこまた他の星達を眺めはじめた。

そうか、探せばいいのか。ぼくはほんとうの僕を探しに行った。

どこから探そうか。

あてもなく彷徨っていると雲に出会つた。

他の星達の輝きに反射して雲の形がはつきりと見える。とても大き

く、そして美しく。

自分では光っていない。ぼくと同じだ。

ぼくは雲なのかもしれない。

「くもさん。ぼくは雲なのかな」

雲さんはもこもことした口調で答えた。

「きみが雲なわけじゃないよ。だつてきみはもこもこじゃないだろう？」

そっか。ぼくはもこもこじゃない。だからくもじゃないんだ。

残念な気持ちでまた彷徨った。

遠くから見た雲さんは自分で光っていないのにとっても綺麗に見えた。
ぼくと同じだとおもったのに。

今度はたかいたかい山に着いた。

その山のとっぺんに大きな木が立っていた。

そうか、ぼくは木なのかもしれない。

「木さん。ぼくは木なのかな」

木さんはとてもきりきりとした口調で答えた。

「きみが木なわけないよ。だって飛んでいるじゃないか」

そっか。ぼくは飛んでいる。だから木じゃないんだ。

暗い気持ちでまた彷徨った。

近くで見た木さんは風を受けて自分の葉を舞わせて踊っているよう

でとても綺麗に見えた。

ぼくと同じだとおもったのに。

いくら彷徨っても本当のぼくはわからなかった。

なんにちもなんにちも過ぎた。

ぼくの横を鳥さんが飛んできた。

「星さん、星さん」

星さん？最初はだれのことかと思った。

「え、ぼくのこと？」

「そうだよ、君しかいないでしょ」

ぼくは星じゃないのに。

「わたし、星になりたいんだけどどうすればなれるのかしら」

星じゃないぼくに聞かれてもわからないよ。

そう答えると鳥さんは

「なんできみは星じゃないの？」

すごく不思議そうな顔で聞いてきた。

そんなのぼくが知りたいよ。

星じゃない理由を教えてよ。
どうしたら星になれるのさ。
ぼくだってしりたいよ。

「あ」

ぼくは気付いた。

ほんとうのぼくを探していたんじゃない

ぼくは星になる方法を探してたんだ。

「ぼくも星になる方法をしりたい」

鳥さんはうれしそうに

「じゃあ一緒にさがしましょ」

ぼくはとりさんと二人で星になる方法を探した。

なんねんもなんねんも過ぎた。

二人ですつと一緒に探したけれど、星になる方法は見つからなかった。

いろいろ聞いたけど、ぜんぜんわからなかった。

やがて鳥さんは長旅で疲れたのか

ちよつと休むね、といって目を閉じた。

そしてその目はもう開くことはなかった。

ぼくは鳥さんのお墓をつくった。空につくった。

また一人になった。その場から離れた。

遠くからみたそのお墓はまるで星のように見えた。

「そうか、鳥さんは星になれたんだね」

ぼくはなんだかすごく満足した。

それで僕も眠くなったんだ。

周りの星達も起きだして、鳥さんのお墓を見て寄ってきた。

ぼくは眠って見えなかったけど、下から声が聞こえた。

「パパ、見て。お空がすごく綺麗だよ」

「本当だ。まるで星の鳥だな」

「みんなすごく綺麗だね」

そのみんなの中にぼくはいない。

でも星になりたかった鳥さんはちゃんと入ってる。

それだけで嬉しかったんだ。

ぼくはともうれしかった。

だからもういいんだ。

ぼくはなんでも。

たった一人のともだちが星になれたんだから。

ぼくは泣いていた。

涙がとまらなかつたんだ。

その場に居られなくて離れた。

「パパ、綺麗な流れ星」

なみだがみんなの光に反射してとても綺麗に光った。

「すごいな、本当に美しい」

そうか、ぼくはなれたんだ。綺麗な星に。

ぼくは星。

いちめんのくろい絨毯にきらきらと輝くほし。

でもひととき元氣のない、ほし。

でもみんなのおかげで輝く星になれた。

だれもが認めるきらきら星に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3178e/>

星は鳥と歌う。

2011年1月20日03時43分発行